



教育を軽く考える風汐を恐れる

東京学芸大学名誉教授 理学博士

藍 尚 禮

教育に古い新しいはない

最近の話題で、私の気にしている事柄の一つに国立法人大学での学部学科再編の問題がある。

文科省のすすめる方向は文系学部、学科を再編させるか廃止させてしまうという方向で動かそうという試み、さらにその中に教員養成学部も縮小させるという施策の推進である。殊に、教員養成学部の中に設けられている教員にならなくても良いというコースを廃止するという方針の実行である。

“教育”と共に人間の生活に不可欠な分野として“医学”がある。両者共に人間の基本的な生活、“命”にかかわりをもつ重要な科学で、文明社会での根本を支える学問、実践の分野を担うものである。医学は今日、その驚異的創造性と技術の展開で、命の安全、安定をいかにすすめるべきかで重大な成果を我々に与えてくれている。

一方、教育は人間の生涯で、成長を続けるための基本的な学び、成長に伴う幸福、豊かさの追求への貢献は文明社会を目指す社会、国家の未来に対し欠く事の出来ぬ先進国への礎をなすものといえる。至極当たり前の事柄にあえて声をあげて話す事では全くない事柄ではあるが、ここで最も大切な“視点”“相違”がこの両者間に存在するのである。それは病んでいる身体命を持つ人々へ救いの手を差し延べるのは医学でなければならない事は当然である。しかし、

健康を取り戻した時、感謝の言葉を残して医師と患者との関係は終わるのが常である。

私ごとながら、七時間もそれ以上もかけて心臓手術をうけ、更に僧帽弁の弁形成手術をも成功させてもらった。その時の医師たちに対し常に想うこと、それは感謝であり、今日の日を送れるという喜びと安堵である。

一方、第二次世界大戦前後（1938～1945）に送った小学校 中学校の時代の恩師のことはいまだにお一人として忘れてはいない。80才を遙かに超えてしまった私に、小学校1年、2年生の頃の受け持ちの女の先生が母に手編みを教えて欲しいと来宅されたことや、3年生の頃から軍国主義教育が表に現れ、きつい小学校中、高学年生時代を過ごしたことも当時の先生方の姿かたち 話し方まで脳裏に残っている。それ以降の大学、大学院と多くの指導者、教師に接することの多かったことが日々の営みと共に脳裏に静かに納まっている。

つまり、教育者は“教え育てる”という一人ひとりの人生に深く関わる事柄に一生記憶に残り、想われる重大な“命の仕事”に携わるということなのである。このように人の一生の中で、常に育て育てられる仕事に携わる人、それこそが教師、教育者なのだということだ。この点で“医学”と“教育”とは異なる側面を持つということである。教育は人なり。子供を教え導く教師の人格や力量、情熱それに加えて真剣さこそが教師に求められるものである。それゆえ、

教育に携わる人たちには、医学を志す人と同様に手厚い教育と養成が不可欠であることは言うまでもない。医師を育てるのに最低6年かけるなら、教育者養成にも少なくとも6年間の教育が不可欠であるはずである。現今の時代の流れに従って言うならば、最低6年そして実践のための時間も十分に用意すべきである。文科省がその教育者養成を免許を取得させる、させないだけで改廃を口にするなどとは、“ゆとり教育”を推進させた“愚”を再びくり返そうとしているのだろうか。現職にあった頃、部長会議でこのことを主張した記憶がまだ残っている。今から25年前のことである。少なくとも大切な未来を担う人々に対し、画一化を嫌う時代をつくって来た筈の社会が安易な教育機材の電子化で見事に楽に指導できる方法を教育の世界に導

入した。真の“人間の教育”“一人ひとりを大切に育てる”という国家的な重大な仕事に経済性、安易さ、そして目先の利得だけを導入し教育を変えていこうとする愚かさに不安と危険さを感じるのは私だけだろうか。

今日もまた中学生の自殺が報じられ、教育者は口を揃えて責任を逃れにつとめる。教育の場の退廃が白日のもとに晒されているといえよう。こんな悲しいことの連鎖がいつまで続くのだろうか。

現代のこの国は金（財貨）にもならぬことに力を注ぐことは無駄だというのだろうか？

国家100年の大計という辞は今誰も唱えないみじめな社会がつくり出されているのではないだろうか？